

第1回西表島森林生態系保護地域保全管理委員会
議事概要

意見の内容
<ul style="list-style-type: none"> ○ 昆虫採集や盗掘は大きな問題であるが、人が入ることによる外来種の持ち込みも、対策は難しいが、課題として一つあると思われる。 ○ 生態系保護地域の維持管理に関して、例えば、この年にこういう事があったから、この年はこの箇所の利用を制限するなど、年々の気象等自然条件に柔軟に対応できる仕組みのガイドラインが必要と思われる。
<ul style="list-style-type: none"> ○ 沖縄県全体や竹富町でもガイドの認定制度・養成事業に取り組んでいるが、あまり活用されておらず、ガイドの質を上げて行く体制は整っていないのが現状である。ただし、ガイドの質の向上、認定制度の導入に関しては意見が一致していることから、今後の取り組みで、その辺りが進む可能性があると思われる。 ○ 現在、横断道路の利用に際しては、野営地として第2山小屋跡が利用されている。しかし、今回の保護地域の拡充により、今後、使えなくなる。横断する際の安全確保のためには野営地が必要であり、全行程の中間地点である第1山小屋跡を利用するのが最も望ましい。何らかの方策を以て利用できれば思っている。 ○ 事業者のみでルールを策定すると、どうしても事業者の都合が優先される。ルール定めや組織作り、自然環境の保全を進めて行く上では、地域住民を含めて議論を進めるのが、非常に重要なポイントと考えている。
<ul style="list-style-type: none"> ○ 横断道でキャンプができなければ遭難事故等が起る可能性がある。迷わないようなコースづくりを行うべきと思う。 ○ ガイドが変わればコースも変わるのが西表の現状と思われる。山奥までガイド付きのツアーを組んで歩く人もいる。あちこちに穴が開いたような状況になって行くため、やはり、ガイドの認定制度や規制も必要と思われる。これから何らかの形で、保護を含めて上手に利活用が行えれば良いと思う。
<ul style="list-style-type: none"> ○ ガイドに関しては、リピーターの満足度を上げるため、色々な所に行ってしまう。基本的にはお客に迎合しない、自然を利用させてもらう姿勢といったものを教育して行く必要があると思う。 ○ 利用協定に関して、PDCA サイクルが良く回らないと感じており、報告会のような義務的なものを行政から入れることも必要と考えている。 ○ ルールの策定に際しては、地域の理解が必要不可欠である。そのための活動を数年がかりで実践してきており、地域の意見は自社ルールの中に取り入れている。 ○ ルールの策定には中心になる人材が必要であるが、そのような人材が出てくるまで待つよりも、行政の方から指導する方が時間的には早いと思う。 ○ きちんとした理念を、どう作って行くかが非常に大切だと思われる。

意見の内容

- 森林生態系保護地域の保全・保存については、島に住む人々の多様な価値観に対する情報と認識が大切と思っている。
 - 自然の中で生かされている気持ちはあるが、生活の確保とどのように共存するという課題を抱えている。協定の中でも各々の価値観が対立している部分がある。今後、このような価値をどのような形で住民が認識・共有し、子々孫々に残して行くか、そのことを話し合う場を作り、あるいは、話し合いの方法を探ることが課題と思っている。
 - 入山届の提出に関しては、森林管理署、警察署、竹富町を含めて PR に努めており、西表島の宿泊施設等にも周知徹底を図るお願いをしている。しかし、それでも提出しないで遭難する人がいる。行政として心苦しいものであり、どのような方法が良いのかご検討願いたい。
- 横断道路を1日で通り抜けるのはかなり厳しい。保護と利用のバランスを取るとことは難しいが、登山者の安全と便宜を図るためには、やはり、どこかでキャンプすることを認めざるを得ないと思う。
 - 軽装のまま島中央部に人が入ると、事故が心配される。
 - 島の中心部分に人が入ることによって外来生物が入ることも課題であるが、人里周辺に植えられている栽培植物が少しずつ森の中に侵入している。侵略的外来種の植栽についても規制が必要と思われる。
- 自然の保全と利用・学習を両立させるためには、確固たる理念が最初にあって、そうしたことの意識の共有が必要と思われる。今ある自然を利用しても生態系は壊れないことを明らかにする必要があり、その詳細を決めることは難しいとしても、理念を最初に打ち出すことは重要と思われる。また、その理念に従えば、伊澤委員が述べた利用の制限という事態も生じてくるとと思われる。
 - 基本的には規制の形でコントロールすることになると思われるが、制限することによってガイドの収入が減少することにつながる。ガイド自身がこのことをどう考えるか、率直な意見を聴ける機会があれば良いと思う。
- 保全と利用の線引きは難しい問題であり、答えはないかも知れず、時間をかけて行くものと思われる。アクセルを踏み過ぎてもいけないし、ブレーキを掛け過ぎてもいけない。知恵を出し合って合意形成を図って行くことにヒントがあると思っている。去年はゾーニング主体の戦略的部分であったが、今回から技術的なものが入る戦術的な話になってくる。西表モデルというのを発信して行くことが出来たら良いと思う。
 - 対象地域の全域に問題が係っており、それだけ非常に複雑である。その対応方向も個別よりも同時並行にやるべき所があり、課題もハードとソフトに関する部分、運用に関する

意見の内容

- 部分、入山者が主体になる部分、受け皿の方が問題になる部分等があつて非常に難しい。
- ガイドに関しては、本来はライセンスという形で社会的認知を行うことが一番重要ではないかと思われる。内部的なものではライセンスの更新や内部分裂等の問題が残る。
 - 利用者の質という問題は、仕方のない面もあるが、非常に重要であり、教育などである程度カバーできるかも知れない。
 - ガイドの忌憚のない意見は、情報公開による合意形成のプロセスとして対応して行くために足並みを揃えることが重要と思われる。ガイドの生活の担保は非常に難しい所で、地元行政、地元観光協会のサポートが必要かもしれない。
 - 観光というのは属地的なものであり、よそから持ってくる訳にはいかない。地域住民との合意形成、地域の支援が必要である。協定等の制度というのは何時か綻びが出てくるし、老化もすることから、進化して行くことが必要と思う。生態系サービスに求めるニーズも変わってくるので、それに対応することも必要となる。
 - 合意形成やリーダーシップの話に関しては、住民参加型が一つの参考になるかも知れない。企業も CSR（社会的企業責任）として参加して来ている。
 - 普及・啓蒙に関しては、水際で行うことは非常に効果的だと思う。インターネットによるアナウンス、注意は地道かも知れないが、効果的と思っている。